

環境科学部20年のあゆみとこれから

尾坂 兼一

環境生態学科

私は1998-2001年に学生として、2010年現在は教員として計10年間、滋賀県立大学 環境科学部 環境生態学科に在籍しました。2010年に教員として滋賀県立大学に戻って来た際、環境科学部の4学科それぞれの学生の雰囲気は、私が学生のころと変わっていないなと感じました。特に私が所属する環境生態学科の学生に関して言えば、良い意味でも悪い意味でもマニアックな雰囲気が昔と変わっていないことに懐かしさを感じました。開学初期から似たようなタイプの学生が受験し続けているという意味では、開学当時に作り上げていこうと考えていた学科の方向性は今も維持できており、良いことではないかと思えます。

当時は学生であったのでそれほど周囲のことを理解できていたのかは分かりませんが、本大学を取り巻く環境や本大学の学内環境は、私が学生であった1998-2001年と比べて大きく変わったと思います。当時はいわゆる関関同立などの私学の理系は工学部、理工学部、理学部のみで、他の国公立大学を見回しても近場に競合する大学はありませんでしたが、現在では周囲に競合する大学が多々あり、インパクトを残し続けていかないと、それらの大学に埋もれてしまいます。大学として、周りの人々にも容易に分かるようなインパクトを残し続けていくことは、システムの的にもアイデア的にも難しいことであると思えますが、某私立K大学などはマグロ養殖研究のインパクトによりこの十数年で本当に知名度が上がったと思います。もともと実力・知名度ともに抜群ですが、某国立K大学のiPS細胞研究などのインパクトも計り知れないと思います。研究成果の多くは短期間で出るものではなく、また、大半の研究は受験生には分かりづらいと思いますが、インパクトのある研究成果は確実に大学のブランド力を上げると某私立K大学の例から思いました。

その一方で、私が学生であった時と比べて、本学教員による講義時間数の増加、教員数の削減、運営費の削減など、本大学の学内環境は厳しい状況にあり、新しい研究がより生まれにくくなっていると思います。時間や運営費の使い方の効率化によってカバーできる部分もあると思いますが、教職員数や運営費が潤沢に確保された上で(そこまでなくてもせめて他の国公立大学と同程度に確保された上で)、なおかつ効率的に時間や運営費を使うようになれば、

そのほうが高い競争力を得ることができるのは明らかです。本大学の現状がもたらす結果として、優秀な教員・職員の定着がおびやかされることになれば、大学としての競争力のさらなる低下につながりかねないと不安になります。

昔焼肉屋のCMで笑福亭Tが「うまいもんはうまい」と言っていました。やはりお肉はおいしいと思います。工夫をして料理した野菜もおいしいですが、私にとってはただ焼いただけのお肉にも勝てません。工夫して料理したお肉には歯も立ちません。こんなことを言っているので、私自身はこの十数年のあゆみで10kgも太ってしまいました。これは良くないです。